NEWS
The Kagawa Museum

vol.53
香川県立ミュージアムニュース
2021 夏号

Contents

特集
資料と向き合う
～最明寺蔵伝山田蔵人所用甲冑をめぐって～

調査研究ノート vol.40
洋画家小林萬吾の関連資料から

ミュージアムガイダンス vol.42
「刀剣」の手入れについて

収蔵品紹介
重要文化財「月江正印墨蹟　印可状」

れきみんだより
瀬戸内ギャラリー開設　瀬戸内文化の発信強化
突んぼう漁師に聞く～大分県臼杵市風成～

仁尾の雨乞龍

1977年製作　1988年修理　全長約16m　瀬戸内海歴史民俗資料館蔵

仁尾町雨乞龍民俗資料保存会（当時）によって、真竹を骨組みに裸麦の藁を主材料としてつくられた雨乞龍。仁尾町（三豊市）では昭和14年（1939）の干ばつのおり、各農家から持ち寄った材料で龍をつくり、若者たちが愛媛県の黒蔵渕（四国中央市）からリレー形式で運んできた一斗樽の水を龍の頭にかけて町内を練り歩き、海に流し、雨を祈りました。今春、瀬戸内海歴史民俗資料館の第1展示室から第6･7展示室に移動し、間近に見られるようになりました。香川用水通水以前の、渇水に立ち向かった人々の思いが詰まった資料です。

特集

資料と向き合う ～最明寺蔵伝山田蔵人所用甲冑をめぐって～

高松市塩江町安原下に所在する最明寺（画像1）。この寺に伝わる、戦国武将山田蔵人が用いたという甲冑をめぐって、当館が取り組んだ内容について紹介します。

1

2

3

4

はじまりは資料情報から

伝山田蔵人所用甲冑をめぐる一連の活動の発端となったのは、甲冑を所蔵する最明寺と周辺の方々からの資料情報でした。「寺に山田蔵人が使ったという甲冑が伝わっているが、一度見てほしい。」との連絡をうけ、現地に赴きました。

原物の調査に加え、当日集まっていた周辺の方々からの聞き取りを行ってみると、元は山田蔵人の子孫にあたる家に伝わった品で、大正時代に最明寺に奉納されたらしいことが確認されました。

伝山田蔵人所用甲冑

最明寺に伝わる甲冑は、兜・胴・籠手・面頬・佩楯（部分）・臑当が遺っています。袖がありませんが、当初からの可能性も考えられます。したがって、全具が揃った完品かそれに近い状態であるといえます。

兜（画像2）は、6枚の鉄板を張り合わせて鉢（頭にかぶる部分）を形作っています。頭頂部がサビによって大きく欠損しているため、元の形状が分かりませんが、突盔形もしくは瓜形であったと推測されます。鉄板は薄くのばされ、軽量化を図った戦国期の兜の特徴を示しています。首を守るために鉢から下がる錣は、糸が劣化し外れていますが、全部で8段分が遺っています。この時期の錣は、3段～5段であることが多く、異例の段数はこの甲冑を特徴づける点です。

胴（画像3）は桶側胴で、簡素で制作しやすいことから戦国期などにさかんに用いられた形式のひとつです。胴の最大の注目点は、その大きさにあります。胴高は44.4cm、最大胴囲は116.3cmで、一般的な品と比べると、かなり大きい部類に入ります。所用者が大きな体格の持ち主であったことをうかがわせます。

山田蔵人高清

甲冑の所用者とされている山田蔵人は、実名を高清といい、塩江地域を拠点に、戦国期から豊臣政権期にかけて活動した武将のようです。江戸時代に記された「増真上人伝」「安原記」「全讃史」などの記録資料に略伝が載っていますが、くわしいことは判明していません。

略伝によれば、豊臣秀吉の朝鮮出兵に参戦し、そこで入手した十三仏図や涅槃図を最明寺に奉納したといわれています。これらの品は今も最明寺に所蔵されています。

山田蔵人は、身長が6尺（約182cm）で、「鴻大雄偉」（非常に大きくたくましい）な姿であったといい、最明寺の甲冑の胴が大きいこととの一致は注目されます。

また、山田蔵人は根香寺（高松市中山町）近辺に現れた牛鬼を退治したともいわれています。害をなす妖異であった牛鬼の退治を国主に命じられ、根香寺の本尊千手観音への祈願を経て討ち取り、その角を同寺に納めたという伝承があります。根香寺には牛鬼の絵とその角とされる品が今に伝わっています（牛鬼退治には別の伝承もある）。

1　最明寺境内

2　伝山田蔵人所用甲冑　兜（最明寺蔵）

3　伝山田蔵人所用甲冑　胴（最明寺蔵）

4　甲冑をまとった山田蔵人　野口哲哉画

5　映像作品「根香寺牛鬼伝説」の一場面

6　特別展での展示風景

7　最明寺での公開風景

5

令和2年度特別展「語る武具～ARMOUR & STORIES～」に向けて

最明寺の甲冑について所在情報を把握した後、しばらくして当館において武器・武具を主体とした展覧会を開催することになりました。この展覧会では甲冑や刀剣を美術工芸品として位置づけるだけではなく、周辺にある伝承や伝説にも注目した内容にしようと企画しました。最明寺の甲冑は展覧会の趣旨に合い、展示品の候補としました。

一方、展覧会では新たな試みとして、甲冑を着た人物を題材とした作品制作に取り組んでいる高松市出身の現代美術作家野口哲哉さんに企画段階から協力していただきました。

野口さんは伝山田蔵人所用甲冑と蔵人の伝承に強い関心をもたれたのですが、県外に在住であり、仕事の都合や新型コロナウイルスの感染状況から、現地での調査は困難でした。

そこで、苦肉の策としてスマートフォンのテレビ電話機能を用いて、リモートで調査を決行しました。担当学芸員が最明寺に赴き、野口さんと対話しながら、必要な個所をカメラで映して詳細を検討するという調査方法です。限られた機材と不十分な技術での試みではありましたが、思ったよりもうまく調査を行うことができました。

甲冑の調査に加えて、伝説・伝承に関わる情報を共有することで、野口さんによる絵画作品（画像4）および映像作品（画像5）が誕生し、展覧会に出品されました（映像作品は、野口哲哉さんに加え、プロデューサーの平賀大介さん、現代美術作家の野口二朗さんによる共同作品）。甲冑の出品（画像6）を含め、展示は最明寺をはじめ多くの方々に喜んでいただけました。

地元・最明寺での展示

特別展「語る武具～ARMOUR & STORIES～」の終了後、新たな資料の把握、調査・展示から得られた成果を地元の方々と共有したいと考えました。そのことが、これからの資料の保存や活用をすすめていくための後押しになっていくのではないかという発想からです。

最明寺にご協力をお願いし、伝山田蔵人所用甲冑を寺で公開し、当館の学芸員が解説するという催しを行いました（画像7）。開催日は山田蔵人の命日とし、甲冑に加え、山田蔵人が奉納したと伝えられる十三仏図・涅槃図、さらに野口哲哉さんの作品もあわせての公開となりました。平日の開催になったにも関わらず多くの方に集まっていただきました。

資料との向き合い方

伝山田蔵人所用甲冑をめぐって、資料の所在を把握することに始まり、展示へと展開させる中で現代美術との交流につなげ、得られた成果を資料の所在する地域と共有するという一連の活動を行うことができました。

改善・発展の余地を多く残していますが、博物館・美術館施設のみで完結するのではなく、いろいろな方々とともに資料を活用し、保存に向けた意識を高めていくための可能性を提示できたのではないかと考えています。

（主任専門学芸員　御厨　義道）

6

7

Notes for Research

調査研究ノートvol.40

洋画家小林萬吾の関連資料から

当館は昨年春、明治中期から昭和の戦後直後まで活躍した香川県三豊市出身の洋画家小林萬吾（1868-1947）を紹介する特別展を開催し、その後も調査研究を続けています。ここでは新たな収蔵資料から、萬吾が友人や東京美術学校（現 東京藝術大学）の教え子たちから受け取った絵葉書について紹介します。

留学中の小林萬吾　個人蔵

ヨーロッパ留学

東京美術学校で教鞭を執っていた萬吾は1911年(明治44)から1914年(大正3）の3年間、官費でヨーロッパへ留学しました。当時のヨーロッパには芸術のみならず、科学や外交など、あらゆる分野に学ぶ日本人留学生が入れ替わり滞在し、彼らは専門を問わず縦横に交流していました。萬吾も石井柏亭、小杉未醒、山本鼎、和田三造などの洋画家をはじめ、歌人の与謝野鉄幹・晶子夫妻、建築の本野精吾、天文学の福見尚文らと親しく交わりました。

さて、萬吾はパリを拠点に、イギリス、ベルギー、オランダ、ドイツ、オーストリア、イタリア、スペインなどを旅しました。他の日本人留学生たちも同様にヨーロッパ諸国を旅し、旅先から萬吾に絵葉書を送っています。全95通のうち約半数をヨーロッパ留学中、残りの多くを帰国後の東京で受け取っています。

小林萬吾《アトリエ》 1912年　当館蔵
パリの萬吾のアトリエには多くの葉書が届いた。

萬吾が受け取った絵葉書　当館蔵

留学生画家たちとの交流

差出人54名のうち、金山平三（1883-1964）からの絵葉書は23通あります。金山は東京美術学校出身の洋画家で、萬吾より1年遅れて、1912～15年に留学しています。金山は、スペインやベルギー、オランダなどの旅先で買い求めた絵葉書を、しばしば萬吾に送りました。そこには旅先の街や人々の様子、作品の制作状況、同行画家などが記され、活気に満ちた留学生たちの姿が鮮明に伝わってきます。金山と萬吾は15歳の年齢差があり、日本では教え子と教師という立場でしたが、留学中は同志として接していたことが読み取れます。

また1913年7月には、フランス北西部の自然豊かなブルターニュ地方へ、多くの留学生画家が出かけており、萬吾は「あなたも早くおいでなさい」との誘いの葉書を数人から受け取っています。43歳で留学した萬吾は、若い日本人留学生の良き兄貴分であったようです。萬吾にとってもヨーロッパ各地から届く新鮮な情報は、大いに刺激となったことでしょう。ときに社会情勢も反映され、第一次世界大戦が起こった1914年以降は、戦争のため旅行のみならず写生をするにも困難が生じたとの記述が見受けられます。

関連資料から見えること

絵葉書からは、画家が作品を描いた当時の様子がうかがえ、制作背景を読み取れるとともに、画家の性格も垣間見えます。絵葉書の文面を作品に照らし合わせ、そこにある物語を想像してみると、作品がより身近に感じられ、それまでとは違った印象を持つかもしれません。

萬吾に関連する資料は、絵葉書の他に手紙やアルバム、手帳等が残されています。作品を鑑賞して「この絵についてもっと知りたい」と感じた時に、このような関連資料がその一助となり、絵画鑑賞の楽しみが増すならばうれしく思います。

※絵葉書全95通の詳細は『ミュージアム調査研究報告 第12号』に掲載しています。

（学芸課職員　芳地　智子）

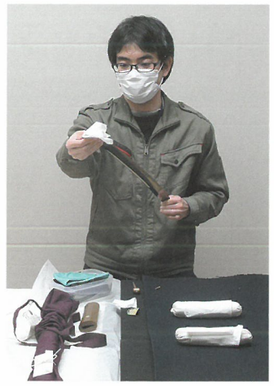
ミュージアムガイダンス vol.42

「刀剣」の手入れについて

博物館や資料館で刀剣が展示されているのを見たことがある人は多いと思います。錆防止や、状態を保つため定期的な手入れが必要である点が刀剣の特徴です。当館では現在、展示の有無に関わらず、1点あたり1年に1回ずつのペースで刀剣の手入れを行っています。

では、実際にどのような形で手入れをしていくか見ていきましょう。今回は当館で行っている手入れの方法を紹介します。まずは、とても肌触りの良い上質なティッシュを使い、刀身の油等を拭います。最初の方は汚れや前回手入れ時の油が刀に付着しているので、頻繁にティッシュの面を変えます。前回手入れ時に塗った油も、錆の原因になるので、綺麗に拭き取ります。それを何回か繰り返し、刀身が綺麗になったら、次は特殊な布で仕上げ拭いをします。打ち粉を使って、拭う時もあります。最後に、錆防止のために刀剣用の油を適量塗ります。油の量を多すぎず少なすぎず塗るのが難しいところです。以上が手入れの一連の流れになります。刀剣には刀や太刀、脇指、鑓などがありますが、基本的に手入れの方法は変わりません。

鞘から刀身を抜く筆者



刀身の汚れを拭き取る様子

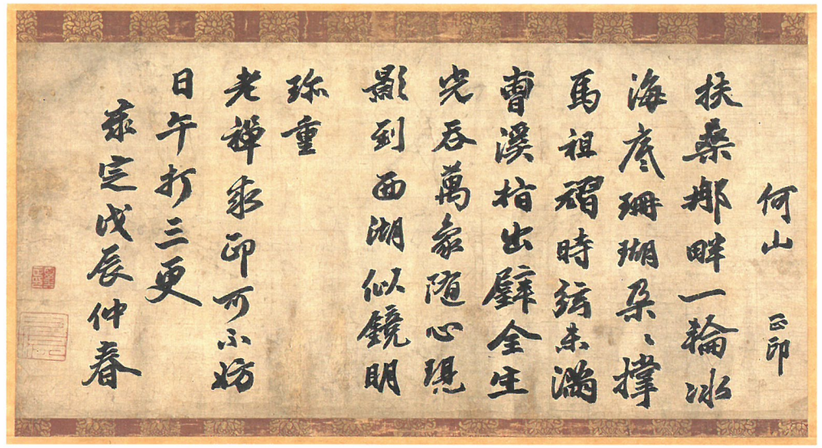
このように手入れを行っていきますが、手入れを始めようと、いざ刀剣を手に持つと、なかなか緊張するものです。今後も継続的に刀剣の手入れを行い、いつでも展示できるよう準備しておきたいと思います。

（学芸員　川邉　優佑）

収蔵品紹介

重要文化財
「月江正印墨蹟　印可状」

中国・元時代　泰定5年（1328）
紙本墨書・掛幅装
当館蔵



中国・元代の禅僧・月江正印（1267～没年不詳）が、弟子である日本からの留学僧・老禅に与えた印可状。印可状とは、禅学修業の皆伝を意味する証明書のこと。月江正印は元代随一の高僧と仰がれ、日本からも多くの禅僧が弟子入りしました。冒頭にある「何山」は、月江正印が住んだ中国・湖州にある宣化寺の山号。馬祖、曹渓といった禅の先人たちに言及しつつ悟りの境地を表し、老禅への印可としています。

高松松平家には、延宝元年（1673）、初代藩主・頼重が隠居を許された際、四代将軍徳川家綱から直々に拝領し、もたらされました。2年後の延宝3年（1675）4月、出府して将軍に面謁した後、大老酒井忠清や老中などを招いてもてなす中、本作品を茶室に掛け、二代藩主・頼常のお点前で濃茶をすすめ、披露しています。

禅の世界ではもとより、芸術、茶道においても珍重される墨蹟、厳格な修行を経て与えられる印可状の持つ価値の高さ、将軍家からの拝領品であること、松平家伝来の資料の中でも特筆すべき名品です。

（専門学芸員　髙木　敬子）

瀬戸内ギャラリー開設　瀬戸内文化の発信強化

瀬戸内ギャラリー第１回企画展「布の力」展示風景

瀬戸内ギャラリー

瀬戸内海歴史民俗資料館（以下「歴民」と表記）では、今春3月20日より第1展示室2階（約100㎡）を瀬戸内ギャラリーとして位置づけ、「瀬戸内文化発信の場」として活用していくことにしました。

「瀬戸内」「海」「くらし」「伝承」「知恵」「技」「心」「デザイン」「自然」「環境」など、歴史民俗資料館のコンセプトや収蔵資料を生かしたテーマで、歴史・民俗・美術などの各分野別、または総合的・分野横断的な企画展を行います。歴民自主企画をはじめ、本館（県立ミュージアム）との共同企画、外部の調査研究機関、教育・行政機関、関係諸団体・民間団体(営利を主目的としない団体)、個人（アーティスト・コレクターなど）との共同企画での開催を試行していく予定です。

令和３年度の企画展

瀬戸内ギャラリー第1回企画展は「布の力―漁民のドンザ―」を開催しました（～6月27日）。歴民が所蔵する13点の漁民のドンザ（仕事着）を中心に、継ぎ当てされたり刺し子が施されたりした布製品を展示しました。そこには幾世代にもわたって伝えられてきた人々の「知恵」や「技」、そして「心」が込められていました。

第2回企画展は、「瀬戸内の石ごころ―アキホ・タタ彫刻展―」を開催予定です（7月10日～9月5日）。先祖が帆前船（洋式帆船）で庵治石を大阪に運んでいたという作家アキホ・タタがその遺伝子に刻まれた記憶に思いを込めた作品展で、庵治石をはじめ、瀬戸内の北木石・青木石・犬島石などを使った展示を予定しています。歴民第5展示室の石工用具の展示と併せてご覧いただきたいと思います。

第3回企画展は、瀬戸内を拠点に活動するアーティストのネットワーク化や地域社会に現代アートを浸透させる取り組みを推進している「瀬戸内アートコレクティブ」と共催し、民俗資料と現代アートのコラボレーションを試みます。沙弥島で詠まれた歌人柿本人麻呂の反歌「沖つ波来よる荒磯を敷きたへの枕とまきて寝せる君かも」に思いを寄せて、鎮魂をテーマにした「国讃めと屍（くにほ　しかばね）―藏本秀彦・水谷一　美術展―」を企画中です（9月18日～12月19日）。民俗学は当初から「霊魂」の処理や行方、先祖の供養や無縁の霊が及ぼす災厄などについて強い関心を払ってきました。「心意」を大切にしてきた学問といえます。現代アートの作家たちが、瀬戸内の木造船や漁具などを展示した大空間を背景に、瀬戸内の海と鎮魂をテーマに新たなコラボレーションを展開していただけるものと思います。

第4回企画展は、「歴民館長の瀬戸内本箱」を予定しています（令和4年（2022）1月4日～3月21日）。瀬戸内国際芸術祭2022の開催に際し、「瀬戸内をより深く知るための本」や「民俗をより理解するための本」などを紹介する展示です。ギャラリーの椅子に腰かけ、手にとって読んだり、見たりしていただきたいと考えています。

開館 50 周年に向けて

令和5年度、歴民は開館50周年を迎えます。開館したのは昭和48年（1973）11月です。この年はいわゆる「瀬戸内法」が施行された年でもあり、当時の瀬戸内海の水質汚染は著しく「死の海」とも呼ばれた時期でした。歴民の開館後に発行された「資料館だより№1」に寄稿された文化庁関係者はその結びに次のような一文を記しています。

> 今日では、環境保全・海の清浄化が叫ばれているにもかかわらず、赤潮被害や重油流出事故などが引き続いて、瀬戸内海の汚染はますます拡大することが懸念される。単に過去を振返るだけに止まらず、内海の美しさと平和を取戻す未来図に、この資料館が大きな示唆を与える存在になることも期待したいものである（田原久「地方歴史民俗資料館の意義」1975.3.31）。

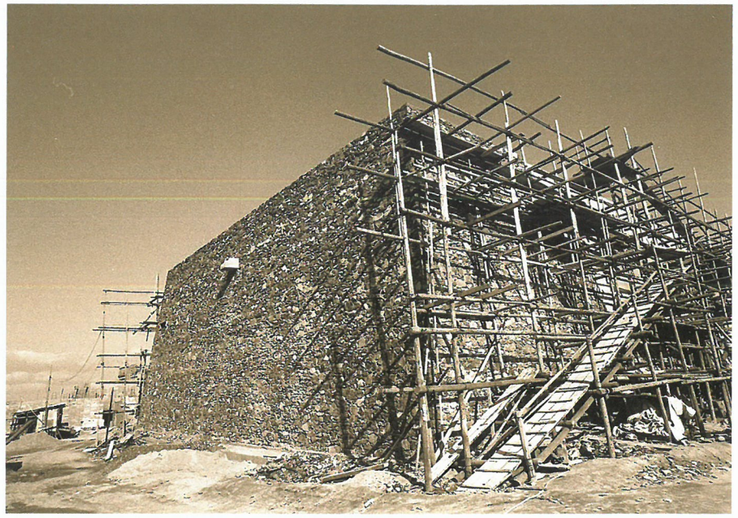
歴民の使命として、歴史民俗の舞台である瀬戸内海の環境にもコミットメントすべきとの見解であり、瀬戸内法によって水質改善はされたものの、海ゴミ問題も含め「豊かな海」を取り戻すまでには至っていない現在の瀬戸内海環境への眼差しを忘れてはならないと考えています。

また、これまで歴民が収集してきた民俗資料約27,000点の5割以上は生産・生業・職人の用具となっています。それらは、自然環境や魚などの生物、植物の習性・性質を生かした用具がほとんどです。そこにくらす人々と密接に関わる環境や風土と無関係ではありません。単なるモノではなく、そこに自然を読み解き、生かしてきた人々の知恵や技が込められた道具たちです。

また、地域の風土に根ざした伝統工芸や産業の発展は、絶えず時代や社会の影響を受けて、新たなデザインや技法の革新・創造とともに行われてきました。これからもそれらは行われ続けるでしょう。

こうした視点や諸課題に立脚・対峙した時、単に歴史民俗を振り返る展示施設というだけでなく、未来への灯台となる施設となるため、総合的・分野横断的な企画設定が必要と考えます。開館50周年を機に、瀬戸内ギャラリーを舞台に、「瀬戸内」をとりまくさまざまなテーマに関心を持つ、異分野の人々が集い、新たな化学反応・展開を見せることを期待しています。

（瀬戸内海歴史民俗資料館長　田井　静明）


建設中の瀬戸内海歴史民俗資料館（1972 年頃・高橋克夫氏撮影）

突（つき）んぼう漁師に聞く
～大分県臼杵（うすき）市風成（かざなし）～

大分県臼杵市風成では漁師が8月から12月にかけて対馬に出漁して、その南端の豆酘（つつ）浦を拠点に船内で寝泊まりしながらモリで外洋性大型魚のカジキを捕る、いわゆる「突んぼう漁」を行っています。小型船のミヨシには3段の突き台があり、魚を探す時は1段目に立ち、魚を突く時は最上段の3段目に立ち、漁が多い時はすぐに突けるよう2段目に待機します。船の中央の見張り台で、もう一人の漁師が船を操舵し、合計２人で操業します。全長約5.4mのモリの3つに分かれた先端部分にはツバクロと呼ばれる小銛が装着され、刺さるとこれだけが抜け、電流が流れて魚を麻痺させるようになっています。

突んぼう漁の船（大分県臼杵市風成）

モリにツバクロを装着する（同上）

「突んぼう漁」のコツは、船が波で揺れる中、先端のミヨシが下がった瞬間にモリを打つことで、カジキの位置よりも先の進行方向を予測してこれを投げることです。また、カジキを追う時は魚が太陽を背にするような位置どりをすることです。モリが命中したかどうか肉眼で確認できませんが、当ると肩にジーンという感覚が伝わるといいます。モリは手から離れているので不思議な現象ですが、他の漁師に聞いても同じような感覚があるといいます。当ったモリに装着された綱でカジキを曳きます。その際、力任せに曳くとモリが抜けるので、波の揺れに合わせて曳いたりゆるめたりして魚の疲れを待って、これを曳き揚げます。

「突んぼう漁」は大分県で明治時代に始まり、千葉県では17世紀に記録があらわれます。今回の聞き取り調査で得た知見は、テーマ展「瀬戸内海の海上生活」（会期7月10日（土）～9月26日（日））でパネル展示する予定です。

（瀬戸内海歴史民俗資料館　専門職員　真鍋　篤行）

※ここで紹介した展示予定は、新型コロナウイルスの感染状況によって変更になることがあります。

常設展「描いて、眺めて　讃岐の文人画」関連行事

学芸講座　　聴講無料・要事前申込

◎「讃岐の文人画とその交流」

「描いて、眺めて　讃岐の文人画」（4月16日（金）～8月8日（日））では、江戸時代に活動していた讃岐ゆかりの文人画家たちの作品を紹介しています。
本講座では展示に関連して、讃岐ゆかりの文人画たちを彼らの交流関係に触れながらその活動をたどります。

日　　時：7月31日（土）13：30～15：00
場　　所：地下1階　講堂
講　　師：鹿間　里奈（当館主任学芸員）
定　　員：100名（先着順）
申込期間：6月30日（水）～7月30日（金）
（定員になり次第終了）

長町竹石「五剣山図」
文化元年（1804）
高松松平家歴史資料　当館保管

学芸講座の申込方法

電話、はがき、FAX、「かがわ電子自治体システム」（※）を利用したインターネットから。はがき、FAXの場合は氏名、電話番号、行事の名称を明記してください。
申込先：〒760-0030　高松市玉藻町5番5号 香川県立ミュージアム学芸課
TEL.087-822-0247　FAX.087-822-0049
※新型コロナウイルスの感染状況によって開催方法の変更や延期・中止などの場合があります。当館HPなどで最新情報をご確認ください。

※「かがわ電子自治体システム」を利用する場合

香川県立ミュージアムホームページの「関連リンク」から「【香川県】電子申請のページへ」をクリックしてください。

「鯵」の陶板をご寄贈いただきました

公益財団法人 松平公益会より、高松松平家に伝来する江戸時代の魚類図譜「衆鱗図」の中の「鯵」の陶板をご寄贈いただきました。
陶板は、光沢のある美しい色彩や、細部の緻密な表現まで忠実に再現されており、「衆鱗図」の魅力を感じていただくことができると思います。
1階ロビーに展示しておりますので、間近でご覧ください。

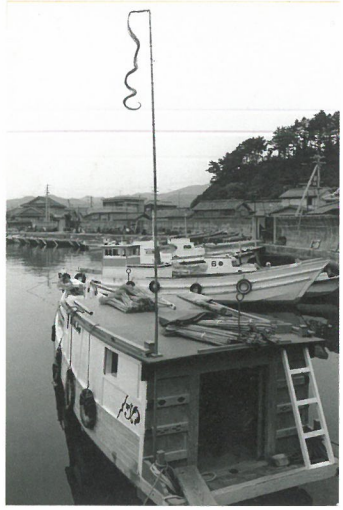
（右）松平頼武会長
（左）象山稔彦館長

瀬戸内海歴史民俗資料館

テーマ展

「瀬戸内海の海上生活」

瀬戸内海では、古くから行商や漁撈を行うために海上生活が行われてきました。鳴門の堂浦を拠点に瀬戸内海全域にテグスなどの漁具を行商したテグス船の資料や、タイ網漁やサワラ網漁の際、船上で使用した生活資料を展示し、海上生活の具体的な様子を紹介します。



テグス行商船
大神丸

会　　期：7月10日（土）～9月26日（日）
会　　場：第9・10展示室
開館時間：9：00～17：00　※入館は16：30まで
休 館 日：月曜日、9月7日（火）～12日（日）
観 覧 料：無料

瀬戸内ギャラリー　第2回企画展

「瀬戸内の石ごころ ―アキホ・タタ彫刻展―」

先祖が帆前船（洋式帆船）で庵治石を大阪に運んでいたというアキホ・タタ。その遺伝子に刻まれた記憶に思いを込め、庵治石をはじめ、北木石・青木石・犬島石などを使った作品を展示します。

会　　期：7月10日（土）～9月5日（日）
会　　場：第1展示室2階　瀬戸内ギャラリー

瀬戸内海歴史民俗資料館は、令和5年11月には開館50周年を迎えます。日本建築学会作品賞受賞の建物の魅力とともに、「瀬戸内」文化を知るために、個人・団体でのますますのご利用をお待ちしています。詳しくは当館まで。

お問い合わせ先：瀬戸内海歴史民俗資料館　TEL.087-881-4707
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/setorekishi/index.html

カフェポット ミュゼ

くつろぎのひとときに、カフェポット ミュゼをご利用ください。

営業時間：9：00～17：00
（オーダーストップ 16：30）

ミュージアムショップ

1階ミュージアムショップでは、当館オリジナルグッズも販売しております。

営業時間：9：00～17：00

香川県立ミュージアム
〒760-0030 高松市玉藻町5番5号
TEL.087-822-0002（代表）　FAX.087-822-0043
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/kmuseum/index.html

【分館】**瀬戸内海歴史民俗資料館**
〒761-8001 高松市亀水町1412-2
TEL.087-881-4707　FAX.087-881-4784
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/setorekishi/index.html

【分館】**香川県文化会館**
〒760-0017 高松市番町1丁目10番39号
TEL.087-831-1806　FAX.087-831-1807
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/kmuseum/bunkakaikan/kfvn.html

●発行日 令和3年（2021）7月2日　●編集・発行 香川県立ミュージアム　●印刷 株式会社太陽社